

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月24日現在

機関番号：12102
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21720089
 研究課題名（和文） 多文化主義と暴力——現代英国における文化翻訳と身体の可傷性について
 研究課題名（英文） Multiculturalism and Violence: Cultural Translation and Vulnerability in Contemporary Britain
 研究代表者
 清水 知子（SHIMIZU TOMOKO）
 筑波大学・人文社会系・講師
 研究者番号：00334847

研究成果の概要（和文）：

現代英国における多文化主義の可能性と限界について以下の知見を得ることができた。1) 新自由主義社会においていかに移民が分断され、「国民」が再編されたか、その構造の変化について明らかにした、2) 多文化主義の根底にあるリベラリズム、世俗主義の暴力性がどのように主流の見解として社会のなかで機能しているのかをメディアの表象から明らかにした、3) 上記1)、2)のなかから高まった他者への不信感と監視社会政策への傾倒を考察し、現代社会におけるコミュニティの実態がどのように変化しているのかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This research will show the following points. 1) Neoliberal society has dramatically divided the immigrant community and race consciousness. 2) Multiculturalism in UK is based on liberalism and secularism, which worked as a kind of violence for muslim immigrrants.3) Both 1) and 2) bought a sense of distrust for others, which urged “people” to the surveillance society. 4) The structure of community has dramatically changed during above circumstances.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英語圏文学、多文化主義、人種、メディア、暴力

1. 研究開始当初の背景

英国は、第二次世界大戦後、旧植民地から流入した膨大な移民、およびその後の加速するグローバル化とともに渡英した新たな移民の流れのなかで、多文化主義を掲げながら、数々の課題を抱え込んできた。

1950年代の移民ラッシュを皮切りに、ノッティンヒル、ノッティンガムにおける人種暴動、80年代のハニフォード事件、ラッシュディ事件、90年代末のスティーヴン・ローレンス事件、そして2011年夏には過去数十年で最大と言われた英国暴動が起きた。その間、英国の移民政策、移民法も何度も変わっている。こうしたなか、2011年にはデイヴィッド・キャメロン首相が英国の多文化主義は失敗した、と公言した。

申請者は、1980年代のマーガレット・サッチャー政権下の英国における文化と暴力について考察した博士論文、及び「現代英国における多文化主義論争と共同性のゆくえ」（平成14年～16年度若手研究B）を通して現代英国における多文化主義の諸問題について考察してきた。その過程で、多文化主義を称揚しながらも、同時に市民権テスト、選択的移民制度の導入など、多様な形態で移民を管理し、国民の再編成が行われていることを明らかにした。

本研究は、そこで課題として浮かびあがった現代英国における多文化主義と暴力、多文化主義とリベラリズム、多文化主義の可能性とその限界について、東欧、アフリカからの新たな移民の動向を踏まえながら、現地のメディア機関、研究者の聞き取り調査をもとに、現代英国の多文化主義の失敗と今後の構想について考察を深めたいと考えて申請した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現代英国における多文化主義の可能性と限界について現代メディアを中心に探求することである。

本研究は、現代のメディア文化において、人種、民族、宗教的な他者がどのように構成されてきたのか、英国の多文化主義の論理と現実の多文化な状況とのあいだにどのような齟齬が生じているのかを明らかにしながら現代英国における多文化主義の課題と今

後の構想を練り上げていくものである。

3. 研究の方法

主に下記の3つの方法によって研究目的の達成を目指した。

(1) 英国における移民政策、多文化主義政策に関する政府文書、新聞、テレビ、映画を中心としたマスメディアにおける報道に関する網羅的な資料収集とその解説。

(2) BBC、ITVをはじめとするテレビ局、出版社、映画監督、アーティストなど、実際にメディアの政策に関わった人々及びその研究者への現代英国における多文化主義のあり方に関する聞き取り調査の実施。

(3) メディアにおける他者表象の理論的分析。それにより英国社会において政治的な構想と現実との齟齬がなぜ生じているのか、そしてどのように描き出されているのか、を明らかにする。

初年度である2009年度は、多文化主義、人種主義、移民政策に関する理論的文献、政治資料、テレビ、映画、文学、アートをはじめとするメディア文化に関する資料収集と先行研究を整理した。

2010年度は、メディア制作者、移民研究者への聞き取り調査を行い、包摂から排除へ向かう新自由主義社会下における多文化主義とリベラリズムの共犯性について考察した。

2011年度は、この年の夏に起き2000人以上の逮捕者を出した英国暴動について、現地の研究者と意見交換を行った。

現在の英国、とりわけロンドンでは、かつての植民地関係を基盤とした移民をもとにした多文化ではなく、90年代、2000年代以降に新たに流入した東欧移民、アフリカ移民及びその二世による新たな多文化状況が生み出されていることがわかった。そうした現実の政治的、社会的なもつれと多文化主義の失敗がどのようにリンクしているのかを検証を行った。

4. 研究成果

本研究は、1990年代以降の移民政策の再考、現地政策機関、メディア関係者への聞き取り調査、メディア文化をもとに理論的に考察し、以下の点について明らかにすることができた。

1) 現代英国における新自由主義と移民政策について。

1981年国籍法以後の移民政策、市民権テストの導入がどのような議論のもとでなされたかを新自由主義の流れと照らし合わせながら考察した。こうした新たな移民政策は、かつての植民地関係からの移民から、よりグローバルな資本主義に即した東欧からの一時的な低賃金労働、スポーツ移民等へと質的転換を遂げたことを明らかにした。

2) 多文化主義とリベラリズムの共犯性について。

英国においてリベラリズムの原理は、表向きの「寛容さ」とはべつにきわめて暴力的、保守的な機能を担っていること、メディアを通じてリベラルな見解が社会の主流の見解として理解され、逆に少数派の見解が排除されることになる構造を、具体的ないくつかの事例をもとに明らかにした。

3) ディアスポラ文化の可能性と今後の行方について。

ディアスポラ文化の構造は、アイデンティティ闘争、「新しい社会運動」が際だっていた1970～80年代からは変化している。今日、資本主義的な勝者は、むしろ民族的共同体に以前ほど与することなく、個人として社会に参与する傾向が強くなり、トニー・ブレア以後のコミュニティに力をおいた政策の進行とあわせて考察する必要がある。そうした観点からここ数十年のディアスポラ文化の構造的な変化を聞き取り調査と具体的なメディア文化のテキスト分析から明らかにした。

4) グローバリゼーションにおける資本主義的暴力と国民の再編について。

上記1)～3)と併せて、結果として教育制度の改変もふくめ、経済的な視点から「国民」

の再編が進行しており、またそこからこぼれ落ちた者たちの受け皿があるわけではない。2011年の英国暴動もまた、こうした政治的、社会的背景、階級の再編とあわせて考える必要があり、同時にそれは本研究の課題でもある多文化主義の陥穽を考えるうえで重要な要点になっていることを明らかにした。

上記1)～4)について、テレビ、ラジオ、映画をはじめとするメディア制作者への聞き取り調査を行い、関連する歴史的、政治的資料、文献の読解を進めながら考察を進めた。

新自由主義社会において、包摂から排除へ向かう論理が進行しているが、ここ30年のあいだに、社会の不安と恐怖の対象として生み出される他者の作り方が大きく変化していることがわかった。

現在、英国の移民はかつてのように「色」に基づく人種主義ではなく、より分断され、多様化し、階級化されている。さらに、2011年夏に起きた英国暴動は、多文化主義を考えるときに、若者たちのギャング文化に目を向ける必要があることを改めて感じさせる出来事だった。

1980年代に台頭した新自由主義は、その後かたちをかえてますます深化しているが、そこで生じた政治的、社会的もつれは解きほぐされることなく堆積し、社会への不信感が高まっている。さらにひとたび排除されると、対話不能な他者として截然と社会から切り離す、監獄社会、あるいは社会の軍事化が生じている。こうした新たな潮流について、今後さらに取り組んでいく必要がある。

本研究の成果は今年2012年に単行本としてまとめ刊行する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 清水知子、攻めるミッキー、闘うモモタロウ——戦争とリアリズムをめぐる相克、New Perspective、査読有、Vol. 192、2011、33-44.

② 清水知子、S・ジジエクと現代リベラル資

本主義、POSSE、査読無、Vol. 8、2010、124-138.

〔学会発表〕(計 6 件)

① SHIMIZU, TOMOKO. “Popular Media and Atomic Culture during the Cold War : Science and Future on Disney Imagination in U.S-Japan Relationship,” Inter-Asia Cultural Studies Society (IACSS), 2011 年 12 月 18 日, BRAC University, (バングラデシュ)

② SHIMIZU, TOMOKO. “The Human Condition: Japanese Resistance to and Reinvention, Association for Asian Studies, 2011 年 4 月 2 日, Hawaii University, (米国).

③ SHIMIZU, TOMOKO. Reality and Dream in Satoshi Kon Legacy, Arisia(招待講演), 2011 年 1 月 16 日, Hyatt Regency Cambridge Hotel (米国).

④ SHIMIZU, TOMOKO. In Between: “I” novel and “I” photo in Nobuyoshi Araki’s Photo-World, Association for Japanese Literary Studies, 2010 年 10 月 17 日, Yale University (米国).

⑤ SHIMIZU, TOMOKO. Momotaro Syndrome or the Politics of War in Japanese Animation, Association for Cultural Studies Crossroad 2010, 2010 年 6 月 20 日, 香港嶺南大学.

⑥ 清水知子, 「文化の冷戦とスタジオジブリの誕生」新英米文学会、2009 年 11 月 21 日、早稲田奉仕園 (東京都)

〔図書〕(計 3 件)

① 清水知子, 「アートと公共性」『アート・検閲、そして天皇』、社会評論社、2011、245-257.

② 清水知子, 「ブリジット・ジョーンズの「自由」—サッチャリズムとポスト・フォーダイズムの行方」『愛と戦いのイギリス文化史 1951-2010 年』、慶應義塾大学出版会、2011、

269-283.

③ 清水知子, 「国民と社会の再編をめぐる相克—「電子移民」の台頭と「中流」階級の憂鬱」『多文化社会の〈文化〉を問う』、青弓社、2010、65-95.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 知子 (SHIMIZU TOMOKO)
筑波大学・人文社会系・講師
研究者番号：00334847